

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720176

研究課題名(和文)活動の中断と再開：日常会話の「一貫性」についての会話分析研究

研究課題名(英文)Start and restart of activities in conversation: Conversation analysis on coherence in everyday conversation

研究代表者

安井 永子 (Yasui, Eiko)

名古屋大学・文学研究科・講師

研究者番号：30610167

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、日常会話の自然な流れ、つまり「一貫性」がどのように達成されるかについて会話分析の手法で検討するものである。具体的には、会話における活動の開始手続きと、日常のあらゆる相互行為的偶発性によって進行が中断された活動の再開手続きに焦点を当てた。また、活動の最中に直前の行為とのズレを補正し、活動の進行を助ける資源についても検討した。自然会話データの分析により、接続詞、指さし、先行する発話やジェスチャーの一部繰り返しなど、連鎖やターン間の関係を示し、活動の移行や進行を可能にする言語・非言語行動が特定されると共に、活動の開始や再開手続きのモデル化も試みられたことが本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)：This study aims at investigating, through a conversation analytic approach, how “coherence” in everyday conversation can be accomplished. Specifically, we focus on verbal and nonverbal behaviors of speakers and recipients in the launching of an activity in conversation as well as the restart of an activity abandoned through various contingencies in interaction. The study also investigates the turn-initial items employed to solve the problem of progressivity of an activity in interaction. The analyses of naturally-occurring conversational data reveals verbal and non-verbal resources, such as conjunctions, a pointing gesture, repetition of preceding gesture or utterance, that mark the relationship between turns or sequences. The study also attempts to propose the model of the entry or reentry processes of an activity in everyday conversation.

研究分野：会話分析

キーワード：会話分析 マルチモーダル分析 活動の中断と再開 活動の開始手続き 一貫性

1. 研究開始当初の背景

従来の談話研究では、会話の内容(トピック)が分析対象となる傾向が強く、会話は「文の集合体」として捉えられていた。そのため、一つ一つの文のつながりはその意味内容の関係性に求められ、それにより会話内の「構造」が探られていた。前後の文の関係性をその意味内容から探ることは、後に発せられる内容を踏まえてその前の内容が分析されることを意味する。しかしながら、そのような、「プロダクト」としての会話を事後的に分析する方法では、会話が時間の流れの中で進行するという観点が抜けており、実際の会話の進行途中では、その次に何が発せられるのかということを経験者は知り得ないという事実が考慮されていない (Schegloff, 1990)。

さらに、これまでの談話研究においては、開始と終了が明確に認識され、終始参加者が固定された「単一の会話」を分析対象とすることが多かった。しかしながら、実際には活動の進行途中で参加者が別の活動の開始を促したり、他者が会話に途中参加することで別の活動が割り込むなど、日常会話のあらゆる偶発性により、活動がその進行を阻まれ、一時中断することは少なくない。一つの活動から別の活動に移る際の活動間のつながりの達成について解明することができないという点でも、会話の意味内容のみに着目する従来の談話研究には問題があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、日常会話のあらゆる偶発性の中での「一貫性」(会話の自然な流れ)の達成を、会話分析の観点より解明することを目的とし、会話中に起こる新たな活動の開始や、中断された活動の再開の過程、また、活動の最中にその進行 (progressivity) を阻む相互行為上の問題を解決する手続きにおける参加者の言語・非言語行動に着目している。

本研究の特色は、会話が「自然に流れている」、つまり「一貫している」と認識されるメカニズムを、会話内の行為の構築プロセスに着目して探ることである。活動をプロダクトとして事後的なものとして捉えるのではなく、プロセスとして着目すると、特定の文がなぜその位置で産出され、そのような形式を取ったのかを理解することが可能となる。また、参加者間の関係性の変化や非言語行動にも着目し、より日常会話に近い場面を分析することで、会話の一貫性の問題を日常生活に位置づけて解明することが可能となると考えた。

3. 研究の方法

本研究は、自然発生的な会話をデータとして

用いる会話分析研究である。会話分析は、実際の会話場面を微視的に観察し、会話の参加者によって組織される行為の連鎖構造を解明する手法であり (Schegloff, 2007)、時間の進行において発話内の一語一語が開示される中で、話し手と聞き手が相互行為を通し行為の連鎖を形成する「プロセス」を分析対象としている。データは、家族や友人間の日常の自然会話場面のビデオ収録を使用し、研究の遂行は、データ収録、データ編集、音声発話と身体動作の書き起こし、データ分析、という4つの軸で進めた。

初年度に焦点を当てたのは、データ収録及び編集・書き起こしであった。データ収録は、参加構造の変化が起こりやすい場面と、参加構造が固定された場面との両方で行った。データ編集では、分析環境を整えるため、ビデオ編集ソフトウェアを用い、複数のビデオで収録したデータを同期させ、一つの画面で同じ場面を複数の角度から観察できるようにした。その後、編集の過程でデータにマーキングした箇所ごとに、書き起こし専用ソフトウェアを用い、音声発話の文字化と身体動作の書き起こしを行った。発話、笑い、息遣い、重複する発話の開始点と終了点、身振りや視線の動きとその開始点と終了点、沈黙の長さなど、全てを記録した。その際、言語と非言語行動の関係性を二次元に表現する有効な方法の確立を意識した。

次年度からはデータ分析と研究成果発表に集中した。データ分析では、活動の開始及び再開の手続きをそれぞれ分類した上で比較するところから始まり、最後に会話の流れの一貫性について考察を行った。特に、日常生活における様々な偶発性が引き起こす活動の中断パターンを検討するため、会話の参加者が変わらないときに活動の中断が起こる場合と、参加者が変わることで活動の中断が起こる場合とを分析した。

- 活動の中断が参加構造の変化を伴わない場合：中断が進行中の会話の参加者の誰かによって引き起こされる場面
- 活動の中断が参加構造の変化を伴う場合：それまで会話に参加していなかった参加者が割り込むことで中断が起こる場面、及び、それまで会話に参加していた参加者が会話から抜けることで中断が起こる場面

それぞれについて、元の活動の再開手続きにおける参加者の言語・非言語行動を検討した。更に、活動の最中にも着目し、活動の進行上の問題に対処するために用いられる資源についても検討した。

4. 研究成果

本研究により、活動の開始・再開手続きや

活動の最中において、直前のターンや連鎖や活動と次に開始・再開、または継続する活動との関係の提示を行ったり、これから開始される活動における参与枠組み（発話を直接向けられる聞き手、話題の登場人物、など）の提示を行うリソースとして、次のように指さしジェスチャー、接続詞、先行発話やジェスチャーの一部繰り返しなどの言語・非言語行動が用いられることが明らかになった。

- ・ データからは、活動の開始において、直前の話し手に向けて産出される指さしが頻繁に観察された。ターンを取得した話し手は、そのターンの冒頭で直前の話し手を指さした後、直前のターンと関連した発話を産出する（論文4、5、発表1、9）。まず、ターンの冒頭で直前の話し手に向けて産出される指さしの分析により、直前の話し手による発話（の一部）を指し示すことができる可能性が浮かび上がった。そして、それによって、直前の話し手による発話（の一部）と関連して次の発話が開始されることが示される。つまり、直前の話し手への指さしは、これから開始されるターンが、それまでの会話を直接のきっかけとしたものであること（直前の発話と直接関連する点を持つものであること）を示す手段となっていると考えられる。
- ・ 指さしについては、参与者の一人に向けられる指さしが、参与構造の変化にどう関わるかについても検討した（発表10）。まず、それまで会話に参加していなかった傍参与者を会話に取り込む際、話し手は、これから開始される話題の対象となる参与者に向けて指さしを産出しつつ、同時に視線を聞き手に向けると、新たな参与枠組みの提示を別々の参与者に対して同時に行うことが観察された。また、逆に、それまでの傍参与者が、他者間でなされている会話に割り込む際、割り込み先の会話の直前の話し手に向けた指さしが産出されることも観察された。どちらのケースにおいても、指さしが向けられた参与者の直前の発話（の一部）が指さしによって指し示され、それに関する発話をこれから開始することが示唆されることで、会話に新たな参与者を聞き手として取り込んだり、会話に外部から割り込んだりすることの正当性が示されると考えられる。
- ・ 先行する話し手によるジェスチャーを繰り返して産出する現象にも着目した（論文2、6、発表11）。分析より、先行する話し手によるジェスチャー（の一部）を、別の話し手が後に発話において繰り返して産出することは、先行する発話（の一部）と現在の発話とが直接関係すること、および、今の発話が先行する発話のどの部分と関連して産出されているのかを示す資源となることが示唆された。現

在の話し手は、先行話者によるジェスチャーを繰り返すことによって、先行する連鎖との関連を示しながら現在の行為を構築することが可能となる。特に、語りを開始する際に直前の話し手が産出したのと同様のジェスチャーを産出することは、先行する発話の一部を引用する手段となり、これから開始する語りが、先行するターンと直接関連しており、先行発話によって直接引き起こされたものであることを示す資源となる。

- ・ 以上の通り、語りなどの活動の開始における、先行話者への指さしや先行話者のジェスチャーの繰り返しは、これから開始される活動が、先行する会話により直接引き起こされたことを示す資源であることが明らかになった。Jefferson (1978) は、会話において突発的に開始される語りは、通常、進行中の会話をきっかけとして想起され、それまでの会話との関連が示される形で語られることを指摘している。その際、それまで言われたことの一部が繰り返されること (embedded repetition) によってそれまでの会話における何が語りのきっかけとなったのかが示されることが多いと論じている。本研究課題では、Jefferson(1978)では扱われなかった、それまでの会話と次に始まる語りとの関連を示す言語・非言語資源を明らかにした。
- ・ 中断された活動の再開手続きについては、英語会話において、中断された語りを再開する際に用いられる接続詞「but」の機能について検討した（論文3、発表3、6）。分析の結果、「but」は、進行中の語りに割り込んで語りを中断した活動に直接続かない形で元の語りを再開させる際、一度聞き手の注意をそれまでの活動（語りを中断させた活動）から逸らす作業、つまり、これから再開する語りと、割り込んでいた活動とを切り離す作業を行うマーカーとして機能することが明らかになった。
- ・ 活動の最中に、直前の行為とのズレを補正し、活動の進行が阻まれることを防ぐためにターン冒頭で用いられるリソースの検討も行った。特に、頻繁に観察された接続詞「でも」に着目し、その相互行為上の機能について検討した（論文1、発表2、5、8）。まず、「でも」は、直前の話し手によって求められたのとは異なる対象への反応を示す際、つまり、直前の会話からの焦点をずらす指標として、ターン冒頭に用いられることが観察された。さらに、語りの場面に着目し、語りに対する返答が適切となる位置で、聞き手によってターン開始時に産出される「でも」にも着目して分析したところ、「でも」が、語り手が提示したスタンスへの理解・共感を聞き手が提示すること

を可能にする資源として用いられることが明らかになった。具体的には、聞き手が直前の話し手に対して簡単に理解や共感を示すことに問題がある次のようなケースにおいて、「でも」が理解・共感の反応の前置きとして用いられていたことが観察された：(1) 語り手が示した見解が特殊なものである場合、(2) 聞き手が理解とは逆の反応を先に示している場合、(3) 語られた経験と同様の経験を聞き手が持たない場合。これらのケースにおいて、「でも」が前置きされることで、その後の連鎖位置で理解や共感を示すことの不適切性を自らが認識していることを示すことができると考えられる。つまり、「でも」は、逆接の意味を示す接続詞として用いられるのではなく、その前後のターンや連鎖間の関係性を示すマーカーとして機能しているのである。

以上のように、本研究により、従来の談話研究では明らかにされない、日常の偶発性の中で会話参加者が「自然な流れ」を達成するための言語・非言語資源、及び、活動の開始・再開のための手続きの整理につながったと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

安井永子(2012). 「悩み語りの返答における「でも」の相互行為分析 - 悩みに対する理解の提示を可能にする「でも」について - 」社会言語科学会第30回大会発表論文集, 44-47.

Yasui, E. (2013) Collaborative idea construction: The repetition of gestures and talk during brainstorming. *Journal of Pragmatics* 46(1), 157-172.

DOI:10.1016/j.pragma.2012.10.002

安井永子 (2013). 「接続詞 But の相互行為上の機能について: 中断された語りの再開を指標する場合」 JELS 30, 236-242.

安井永子 (2014). 「語りの開始に伴う他者への指さし: 多人数会話における指さしのマルチモーダル分析」名古屋大学文学部研究論集 (文学) 59, 85-99 .

安井永子 (2014). 「話し手による参加者への指さしについて: 多人数会話の例から」社会言語科学会第33回大会発表論文集, 130-133.

安井永子 (2015). 「連鎖をつなぐジェスチャー—語りにおける先行ジェスチャーの繰り返しについての会話分析研究—」社会言語科学会第35回発表論文集, 96-99.

〔学会発表〕(計11件)

2012年7月 Yasui, E. Pointing as a story-entry device. ISGS5 (International Society for Gesture Studies), Lund, Sweden.

2012年9月 安井永子 「悩み語りの返答における「でも」の相互行為分析 - 悩みに対する理解の提示を可能にする「でも」について - 」第30回社会言語科学会 (JASS), 東北大学.

2012年11月 安井永子 「接続詞 But の相互行為上の機能について: 中断された語りの再開を指標する場合」日本英語学会第30回大会, 慶応義塾大学.

2012年11月 安井永子 「日常会話における「語り」の開始手続き: 相互行為分析の視点から」日本英語学会第30回大会ワークショップ, 慶応義塾大学.

2012年11月 Yasui, E. "I know it is strange, but I can understand you": A Conversational Function of Japanese Conjunction "Demo" in the Responses to Troubles Talk, NCA (National Communication Association), Orlando, Florida, USA.

2013年3月 Yasui, E. On an interactive function of 'but': A disjunctive marker in resuming an abandoned story, AAAL 12, Dallas, TX, U.S.A.

2013年8月 Yasui, E. Assessment sequences in a multi-party interaction: A device for switching a participation framework, IEMCA13, Waterloo, ON, Canada.

2013年9月 Yasui, E. Managing a return and inappropriateness: On an employment of turn-initial "demo (but)" in Japanese, IPrA 13, New Delhi, India.

2014年3月 安井永子 「話し手による参加者への指さしについて: 多人数会話の例から」第33回社会言語科学会

(JASS), 神田外語大学.

2014年9月 安井永子「参与枠組の変化に伴う指さしジェスチャー:語り場面の事例からの一考察」第9回話しことば研究会ワークショップ, 大阪大学.

2015年3月 安井永子「連鎖をつなぐジェスチャー-語りにおける先行ジェスチャーの繰り返しについての会話分析研究-」第35回社会言語科学会(JASS), 東京女子大学.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安井永子 (YASUI, Eiko)
名古屋大学 文学研究科 講師
研究者番号: 30610167